

## 国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識と印象の関連性 －日本における外国人妻を中心に－

伊 藤 孝 惠

### 要 旨

日本における「夫日本人、妻外国人」夫婦 34 組と日本人同士夫婦 34 組を対象に、配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と、夫婦間コミュニケーションの印象との関係を比較検討した。夫婦間コミュニケーションの印象について因子分析した結果、「肯定的印象」「否定的印象」「力関係」の印象に関する 3 因子が抽出された。この 3 因子と、配偶者のコミュニケーション態度に対する「親和的接近」「自己中心」「非円滑」の 3 因子の認識との関係性を探った。その結果、国際結婚夫婦は日本人同士夫婦と比べ、夫婦間コミュニケーションに対し「肯定的印象」をより多く抱いている反面、外国人妻の夫婦間コミュニケーション上で認識されている問題点も明らかとなった。

**キーワード：**国際結婚夫婦、「夫日本人、妻外国人」、日本人同士夫婦、外国人妻  
夫婦間コミュニケーション態度の認識、夫婦間コミュニケーション  
の印象

### 1. 研究の背景と目的

2005 年 1 月 8 日、朝日新聞に「20 組に 1 組が国際結婚」という見出しが躍るほど、日本において国際結婚は広まりつつある。在留資格別にみると、「日本人の配偶者等」で在留する外籍の人は、外国人登録者全体の約 11.1%（2008 年末現在）を占め、非永住者の中では「定住者」に次いで 2 番目に多い。日本における国際結婚の特徴は、「夫日本人、妻外国人<sup>1</sup>」の結婚形態が「妻日本人、夫外国人」を大きく上回り、外国人妻の国籍が、中国、フィリピン、韓国・朝鮮、タイといったアジア諸国で全体の 9 割を占めるということにある。このようなアジア出身の外国人妻は、しばしば「農村花嫁」「アジアからの花嫁」などと称され、日本人女性の晩婚化・未婚化等に伴う農村部を中心とした結婚難と、日本とアジア諸国との経済格差とが相俟り、日本へのヒト（この場合外国人妻）の流動化が加速したのだと示唆されている（葛 1999）。「夫日本人、妻外国人」の結婚ではうまくいっているケースがあるのも事実だが、その一方で「農村花嫁」「アジアからの花嫁」の抱える問題の片鱗として、家族をはじめ周囲との日本語での意思疎通の難しさや、憧憬していた日本での暮らしと実際の農村での生活との隔たりに対する失望、母語や母国の習慣、宗教を尊重してもらえない孤立感などが挙げられている（石井 1995）。中澤（1996）は、子どもに対し、母親である自分の母語や母国の習慣を知ってもらいたいと願う外国人妻は多いものの、夫や夫の家族からは子どもに母語を話しかけることに難色を示され、暗に日本人化を要求されている場合も少なくないという。もっとも、こうしたアジアからやってきた外国人妻が、日本の社会において常に受け身的で、弱者であるという

見方は偏んでいよう。彼女たちを判断力を有する行為者と見なし、自分たちの移動についての解釈と子どもへの教育方針について、中国人妻を対象とした事例に基づき整理した研究も報告されている（賽 2010）。賽（2010）によると、子どもに対し、母親である自分の母語を教えることにも、敢えて教えないことにも、それぞれ中国人母親の異文化葛藤と子どもを通した母親自身の人生の選び直しの希求が通底しているという。そして、結婚による移動に伴い、送り出し社会（中国）での知識が無意味になったり、受け入れ社会（日本）でコミュニケーション手段を失ったり制約されたりするなどの厳しい現実において、中国人母親にとって子どもの教育は数少ない自己実現の表現手段であるという。賽（2010）は、こうした結婚移動に伴うリスクを軽減することが受け入れ社会に求められると示唆している。

これから敷衍すれば、外国人妻の抱える問題について、彼女たちを取り巻く社会的背景から検討することも重要だが、日本における彼女たちの「居場所」ともいべき夫をはじめとする家族に対する認識や態度、行動などに注目して彼女たちの抱える問題を析出することも大切ではないかと思われる。特に、夫婦関係や夫婦間のコミュニケーションに対し外国人妻がどのように認識しているかを探ることは、外国人妻にとって夫との関係が日本社会への適応や結婚満足度の要諦を成しているだけあって、重要であるといえよう。施（2000）では、国際結婚夫婦において、コミュニケーションの量が多いほど婚姻満足度が高くなることが明らかにされており、松本（2001）のフィリピン人の妻と日本人の夫の国際結婚夫婦を取り上げた研究では、言語的コミュニケーションに限らないものの、外国人妻にとって日本人夫とのコミュニケーションが多いと感じられるほど、家庭内での自分の居場所や安堵感が得られやすいと示唆されている。

夫婦間のコミュニケーションが、夫婦関係や結婚生活の満足度に大きく関わることは、国際結婚夫婦に限らない。日本人同士夫婦の場合も、生活方針や家事・育児分担や子どもに対する教育については、結婚前よりも結婚後の方が夫婦間での話し合いが多くなされており、しかも話し合いによる意見の一一致度が高いほど夫婦関係満足度が高いことが示されている（門野 1995）。近代家族では、社会的地位・教育・宗教・職業・国籍などが異なる者たちが夫婦となるケースが多く見られ、その結果、夫婦間の関係性が不安定になったと言われている（宮野 1965）。したがって今日の夫婦関係においては、愛情に基づく情緒的結びつきが夫婦関係を維持する上での橋頭堡と見なされ、互いの情緒や情報を共感・共有し、親密性を高めるためにも、相手へのコミュニケーションの働きかけが一層重要であると思われる。

その一方で、夫と妻とでは、コミュニケーションに対する関わり方に違いが見られ、土倉（2005）の中年期夫婦に関する研究では、夫が孤独を感じるのは「妻がいない時」で、妻が傍にいれば孤独感が解消されるのに対し、妻は夫と一緒にいるだけでは孤独感が緩和されず、時間をかけた会話を通して、夫の自分に対する関心と理解を確認できた時に、はじめて孤独感が解消できるのだと述べられている。情緒と情報というメッセージのもつ二つの側面のうち、情緒的共感を求める傾向にある妻（女性）と、感情の表出を抑制し情報中心のコミュニケーションをとる傾向にある夫（男性）との間に、しばしばコミュニケーションスタイルの齟齬が生じることが指摘されるが（佐藤 1991）、こうした男女のコミュニケーションスタイルの違いは、言語的・文化的背景の異なる国際結婚夫婦にも同様に当てはまるのだろうか。

## 国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識と印象の関連性

そこで本稿では、外国人妻が日本人夫とのコミュニケーションにおいて、日本人夫のコミュニケーション態度をどのように認識しているかを示し、その認識と夫婦間コミュニケーションに対する印象との関連性から、外国人妻の抱えるコミュニケーション上の特徴と問題を、日本人同士夫婦との比較を通して明らかにする。

### 2. 調査方法

#### 2. 1 調査方法

山梨県及びその近県に在住する国際結婚夫婦（夫か妻、どちらか一方が日本人）に質問紙を配布し、回答後、質問紙を郵送してもらった。質問紙は市役所の窓口のほか、地域の日本語教室、日本語学校で配布したほか、友人・知人を介して回答を依頼した。質問紙は、日本語版のほか、同内容を英語訳、中国語訳、韓国語訳、ポルトガル語訳、スペイン語訳、タイ語訳したものを作成し、調査協力者に回答しやすい言語を選択してもらった。調査は、2008年5月から11月まで実施した。

#### 2. 2 調査対象者

本研究では、回収できた回答のうち、「夫日本人、妻外国人」夫婦34組と、無作為に抽出した日本人同士夫婦34組を分析対象とする。この68組については、夫婦が知り合い、結婚に至った方法として、「恋愛」及び「友人・知人の紹介」を選択した、夫婦単位での回答が成立している夫婦である。また、「夫日本人、妻外国人」夫婦のうち、外国人妻の出身が欧米諸国であった夫婦を分析対象から除外し、外国人妻の出身がアジア及び南米である夫婦に限定した。これは、日本全体の国際結婚夫婦の特徴に即したものである。なお、これ以降、特に断りがない場合、国際結婚とは「夫日本人、妻外国人」夫婦を指す。

#### 2. 3 調査内容

配偶者の夫婦間コミュニケーションの態度に対する認識、及び夫婦間コミュニケーションに対する印象を測定する質問紙を作成した。質問紙の作成に際し、予備調査として国際結婚夫婦3組と日本人同士夫婦3組に対し、半構造化面接を行った。この予備調査結果と、夫婦間コミュニケーション及び異文化間コミュニケーションに関する先行研究を参考に、配偶者の夫婦間コミュニケーションの態度に対する認識を明らかにする質問25項目と、夫婦間コミュニケーションに対する印象を測定する14項目を作成した。各質問に対し、「とてもそう思う（5点）」「そう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「そう思わない（2点）」「まったくそう思わない（1点）」の5段階で評定を求めた。このほか、年齢、国籍等の属性や、国際結婚夫婦に対しては夫婦間での使用言語等についても尋ねた。

### 3. 調査結果

#### 3. 1 回答者の属性

「夫日本人、妻外国人」夫婦の外国人妻の国籍は、中国が17名で最も多く、次いでフィリピ

ンが6名、タイ、ブラジル、台湾が各2名で、ほか韓国、ラオス、ボリビア、ペルーが各1名であった。年齢の平均値は、「夫日本人、妻外国人」夫婦の日本人夫が45.9歳、外国人妻が36.7歳、日本人同士夫婦の夫が41.7歳、妻が38.8歳であった。夫婦間の年齢差は、「夫日本人、妻外国人」夫婦では9.15歳、日本人同士夫婦では2.8歳と、いずれも夫の平均年齢が妻の平均年齢より高く、その傾向は特に「夫日本人、妻外国人」夫婦において顕著に見られた。結婚年数の平均値は、国際結婚が約7年、日本人同士が約11年であった。

### 3. 2 使用言語、使用言語能力

国際結婚夫婦の会話での使用言語として、日本人夫は34名中31名が主に「自分の言語」、外国人妻は30名が主に「配偶者の言語」であると回答した。これにより、「夫日本人、妻外国人」夫婦の間では、主に日本人夫の母語である日本語が使用されているといえる。また、外国人妻の4割弱が、自分は夫婦間での使用言語力、すなわち日本語力が十分ではないと感じていた。

### 3. 3 配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識

配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識構造を明らかにするため、25の質問項目について因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用い、クオーティマックス回転を行い、スクリープロットにより因子数を決定した結果、3つの因子が抽出された。因子を構成する項目の信頼性についてクローンバックの $\alpha$ 係数を求めて検討した結果、各因子とも.85以上の強い内部一貫性が認められた。第1因子は、「適切なアドバイスをしてくれる」「あなたが分からることは丁寧に説明してくれる」など助言や説明に関する項目と、「あなたの一日の出来事や様子を関心をもって尋ねてくれる」「出来事や感じたことを気軽に話してくれる」など共感や関心に関する項目から構成されることから、「親和的接近」と命名した。第2因子は、「自分で話をまとめたがる」「話の内容が気に入らないとすぐ怒る」など自分中心な態度から、「自己中心」とした。第3因子は、「反応が鈍かたりずれていたりする」「文法や言葉の使い方が不適切だったり間違っていたりする」など、会話の円滑さに欠ける態度から成り立つことから「非円滑」と名づけた。なお、各因子を構成するより詳細な項目については、伊藤（2009）を参照されたい。

### 3. 4 夫婦間コミュニケーションに対する印象

#### 3. 4. 1 夫婦間コミュニケーションに対する印象構造

夫婦間コミュニケーションに対する印象に関する14の質問項目について因子分析を行った。因子の抽出には主因子法を用い、バリマックス回転を行った。スクリープロットにより因子数を想定し、複数の因子にまたがって負荷量が高く、解釈が不可能な項目を除外し、再度同様の手順で因子分析を行ったところ、3つの因子が抽出された。因子を構成する項目の信頼性についてクローンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、各因子とも.80以上の強い内部一貫性が認められた。

第1因子は、「お互いの気持ちが分かり合える気がする」「夫／妻と話すと楽しい」「夫／妻

と話しているとリラックスできる」などから成ることから、「肯定的印象」と名付けた。第2因子は、「夫／妻との会話はストレスが溜まる」「夫／妻と話していて寂しく感じる」「夫／妻と話すと疲れる」などから「否定的印象」とした。第3因子は、「会話の中で夫／妻との力関係を感じる」「夫／妻の方が発言力が強いと感じる」「夫／妻と話していると委縮する」の3項目から構成されることから「力関係」と命名した。

### 3. 4. 2 国際結婚夫婦の夫婦間コミュニケーションに対する印象の特徴

国際結婚夫婦の夫婦間コミュニケーションに対する印象の特徴を探るため、まず、夫婦単位で国際結婚夫婦と日本人同士夫婦を比較した。夫婦間コミュニケーションに対する印象の各因子の尺度得点の平均値を求め、t検定を行ったところ、「肯定的印象」で有意差が認められた( $t=4.076$ ,  $df=127$ ,  $p<.01$ )。これにより、国際結婚夫婦は日本人同士夫婦と比べ、夫婦間コミュニケーションに対する印象において、配偶者と話すと楽しい、リラックスできるなど、肯定的印象をより多く抱いていることが分かった。

次に、国際結婚夫婦の日本人夫と外国人妻との間でt検定を行い、比較したところ、「力関係」において有意差が見られ( $t=-.558$ ,  $df=61$ ,  $p<.05$ )、日本人夫と比べ外国人妻の方が、配偶者の発言力をより強く感じているなど、夫婦間コミュニケーションにおいて力関係を認識していることが分かった。一方、日本人同士夫婦の間では、夫婦間コミュニケーションに対する印象において違いは認められなかった。

表1 夫婦間コミュニケーションに対する印象

	因子1	因子2	因子3
<b>第1因子：肯定的印象 (<math>\alpha = .940</math>)</b>			
夫婦で意見や情報を共有できている気がする	.854	-.143	-.125
夫／妻と話しているとリラックスできる	.811	-.350	-.179
夫／妻と話すと楽しい	.788	-.398	-.148
お互いの気持ちが分かり合える気がする	.780	-.221	-.052
夫／妻との会話では自然体でいられる	.746	-.413	-.119
夫／妻との会話ではよく笑う	.724	-.386	-.086
<b>第2因子：否定的印象 (<math>\alpha = .896</math>)</b>			
夫／妻との会話はストレスが溜まる	-.302	.808	.243
夫／妻と話すと疲れる	-.420	.803	.208
夫／妻と話すとイライラする	-.361	.669	.208
夫／妻と話していると寂しく感じる	-.293	.586	.246
<b>第3因子：力関係 (<math>\alpha = .827</math>)</b>			
会話の中で夫／妻との力関係を感じる	-.087	.167	.908
夫／妻の発言力の方が強いと感じる	-.063	.127	.760
夫／妻と話していると委縮する	-.183	.331	.605
寄与率	32.511	22.391	15.914
累積寄与率	32.511	54.902	70.816

### 3. 5 配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の関連性

#### 3. 5. 1 国際結婚夫婦と日本人同士夫婦の比較

さらに、配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の関連性について、まず国際結婚夫婦の場合と日本人同士夫婦の場合を、ピアソンの相関係数によってそれぞれ検討した。

国際結婚夫婦においては、配偶者の「自己中心」的態度に対する認識と「肯定的印象」の関係を除き、すべての配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の間に有意の相関がみられた。一方、日本人同士夫婦において有意の相関がみられたのは、配偶者の「親和的接近」態度と「肯定的印象」( $r=.747, p<.01$ )、配偶者の「自己中心」的態度と「否定的印象」( $r=.318, p<.01$ ) 及び「力関係」( $r=.337, p<.01$ ) のみであった。この結果により、国際結婚夫婦は日本人同士夫婦と比べ、夫婦間コミュニケーションの印象に関わる配偶者のコミュニケーション態度に対する認識項目が多いことが分かる。つまり、国際結婚夫婦においては、配偶者がどのようなコミュニケーション態度をとっていると捉えるかが、夫婦間コミュニケーションに対する印象に大きく関与するといえる。夫婦での会話が、楽しい、安らげるものと思えるか、あるいはストレスや寂しさを感じるものなのか、夫婦間に力の差を感じるものかは、配偶者のコミュニケーション態度の認識に依るところが、日本人同士夫婦と比して相対的に大きいといえるだろう。

また、国際結婚夫婦においては、配偶者の「非円滑」な態度に対する認識が、夫婦間コミュニケーションの印象のすべての因子との間で関連性が認められたのに対し、日本人同士夫婦では全く見られなかった。すなわち、国際結婚夫婦にとって、配偶者が正確に、あるいは話の流れを妨げず整然と話していると見なしているか否かが、会話の印象に大きく関わるのに対し、日本人同士夫婦にとっては、そのような話し方に対する認識が印象に関与することはないということである。

このように、日本人同士夫婦と比べ国際結婚夫婦では、配偶者のコミュニケーション態度をどのように認識するかが夫婦間コミュニケーション全体の印象に関わってくることがわかる。そして配偶者が情報の共有や共感的な態度をとっているかどうか、円滑な会話を損なうような話し方をしていないかどうかが、対等で楽しく心地よい夫婦の会話の印象と、より強く結び付けて認識されているといえよう。

表2 配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の相関

		親和的接近	自己中心	非円滑
肯定的印象	国際結婚夫婦	.629**	-.195	-.324*
	日本人同士夫婦	.747**	.147	-.121
否定的印象	国際結婚夫婦	-.421**	.473**	.403**
	日本人同士夫婦	-.225	.318**	.033
力関係	国際結婚夫婦	-.407**	.266*	.274*
	日本人同士夫婦	.104	.337**	.134

\*\* $P < .01$

\* $P < .05$

### 3. 5. 2 国際結婚夫婦の特徴

次いで、国際結婚夫婦、及び日本人同士夫婦の夫と妻それぞれにおいて、配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の関連性をみていく。

国際結婚夫婦のうち、日本人夫については、「肯定的印象」と有意の相関があった配偶者のコミュニケーション態度に対する認識は「親和的接近」( $r=.633$ ,  $p<.01$ )のみであった。「否定的印象」は、「自己中心」的態度( $r=.563$ ,  $p<.01$ )及び「非円滑」な態度( $r=.392$ ,  $p<.05$ )との間に、「力関係」は、「親和的接近」( $r=-.462$ ,  $p<.01$ )及び「自己中心」的態度( $r=.414$ ,  $p<.05$ )との間にそれぞれ有意の関連性がみられた。「力関係」と「親和的接近」の間には、負の相関があった。

一方、外国人妻については、「肯定的印象」と有意の相関が見られた配偶者のコミュニケーション態度に対する認識は「親和的接近」( $r=.638$ ,  $p<.01$ )、「自己中心」的態度( $r=-.410$ ,  $p<.05$ )であった。また「否定的印象」は、「親和的接近」( $r=-.539$ ,  $p<.01$ )、「自己中心」的態度( $r=.404$ ,  $p<.05$ )、「非円滑」な態度( $r=.422$ ,  $p<.05$ )それぞれとの間に有意の相関があった。「力関係」は、「親和的接近」( $r=-.405$ ,  $p<.05$ )、「非円滑」な態度( $r=.423$ ,  $p<.05$ )との間に有意の関連性がみられた。「肯定的印象」と「自己中心」的態度、「否定的印象」と「親和的接近」、「力関係」と「親和的接近」の間には、それぞれ負の相関があった。これらの結果から、外国人妻にとって、日本人夫が出来事や悩み事を話してくれたり、自分の話に傾聴してくれたりするなど、親和的に自分に寄り添ってくれていると感じられることが、夫婦間コミュニケーションの印象のすべての項目に関わる重要な役割を担っているといえる。また、不適切な言葉遣いや応答、まとまりのない話をするなど、円滑なコミュニケーションを損なう配偶者の態度が、「否定的印象」だけでなく夫婦間の「力関係」を感じさせる要素となっていることも、日本人夫と異なる点である。全体として、夫婦間コミュニケーションの印象と関係性のある配偶者のコミュニケーション態度に対する認識の項目数が、外国人妻の方が日本人夫よりも多く、外国人妻にとって、日本人夫のコミュニケーション態度に対する認識が、夫婦間コミュニケーションの印象に大きく関わっていることが示された。

表3 配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の相関 国際結婚夫婦

		親和的接近	自己中心	非円滑
肯定的印象	日本人夫	.633**	.030	-.312
	外国人妻	.638**	-.401*	-.283
否定的印象	日本人夫	-.297	.563**	.392*
	外国人妻	-.539**	.404*	.422*
力関係	日本人夫	-.462**	.414*	.118
	外国人妻	-.405*	.193	.423*

\*\* $P < .01$

\* $P < .05$

### 3. 5. 3 日本人同士夫婦の特徴

配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の関連性について、日本人同士夫婦に目を移すと、夫において有意の相関が認められたのは、「肯定的印象」と「親和的接近」態度 ( $r=.787$ ,  $p<.01$ ) 及び、「自己中心」的態度 ( $r=.364$ ,  $p<.05$ )、そして「力関係」と「自己中心」的態度 ( $r=.358$ ,  $p<.05$ ) であった。妻のコミュニケーション態度に対する認識が、夫の夫婦間の会話における「肯定的印象」に大きく関わっていることが分かる。また、妻が「自己中心」的な態度をとっていると認識することが、夫の夫婦間の会話における「肯定的印象」を損なうほか、夫婦の間に「力関係」を感じることにも繋がっていることが分かった。一方、妻において有意の相関が認められたのは、「肯定的印象」と「親和的接近」 ( $r=.713$ ,  $p<.01$ )、及び「否定的印象」と「自己中心」的な態度 ( $r=.499$ ,  $p<.01$ ) の2つのみであった。国際結婚夫婦の夫、及び妻の場合と異なり、日本人同士夫婦の夫、妻の場合とも、配偶者の「非円滑」な態度に対する認識が夫婦間コミュニケーションの印象と関わることはなかった。

表4 配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と印象の相関 日本人同士夫婦

		親和的接近	自己中心	非円滑
肯定的印象	夫	.787**	.364*	-.067
	妻	.713**	-.138	-.202
否定的印象	夫	-.206	.227	.082
	妻	-.245	.499**	-.020
力関係	夫	.116	.358*	.083
	妻	.055	.236	.177

\*\* $P < .01$

\* $P < .05$

### 4.まとめと考察

#### 国際結婚夫婦は夫婦間コミュニケーションに対し肯定的な印象をもっている

夫婦間コミュニケーションの印象について、「肯定的印象」「否定的印象」「力関係」の3因子が抽出され、このうち「肯定的印象」について国際結婚夫婦と日本人同士夫婦の間で有意差が見られた。これにより、日本人同士夫婦より国際結婚夫婦の方が、夫婦間コミュニケーションに対し、楽しい、リラックスできるなどの好印象を抱いていることが分かった。一般的に、異なる言語・文化背景をもつ国際結婚夫婦のコミュニケーションには苦労が伴い、母語や文化的背景を同じくする者同士と比べ、夫婦の会話を楽しんだりリラックスしたりすることは少ないなどと思われがちだが、現状は異なることが示されたといえよう。

#### 外国人妻は日本人夫よりも夫婦間の会話において「力関係」を感じている

とはいって、国際結婚夫婦の夫、妻とも夫婦間コミュニケーションに対し、互いに同様の印象を抱き、問題を感じていないというわけではない。会話の印象について、国際結婚夫婦の日本人夫と外国人妻を比較してみると、日本人夫より外国人妻の方が、夫婦間の会話の中で「力関

係」を感じており、日本人夫に対して委縮したり、夫の発言力の方が強いと感じたりしていることが明らかとなつた。同様の結果は日本人同士夫婦の間では得られなかつた。また、配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識と夫婦間コミュニケーションの印象との関連性において、国際結婚夫婦では、すべての配偶者の夫婦間コミュニケーション態度に対する認識が「力関係」と相関があつたのに対し、日本人同士夫婦で「力関係」との間に相関が見られたのは「自己中心」的な態度のみであつた。これらの結果は何を意味するのだろうか。

夫と妻の会話では、夫の方が妻に対して命令口調である、話の内容が気に入らないと怒る、都合の悪い話には黙り込むなど、威圧的で無視・回避の態度をとる傾向があるとされ（平山・柏木 2001）、伊藤（2009）においても、日本人同士夫婦の間で、夫の方が「自己中心」的な態度をとっていると妻が認識している結果が確認されている。しかし、そのような配偶者の「自己中心」的な態度への認識が「力関係」というコミュニケーションの印象と直接結びつくかどうかは、別問題である。確かに、夫婦単位で見た場合、国際結婚夫婦、日本人同士夫婦とも、配偶者の「自己中心」的な態度への認識と、「力関係」に相関が認められたが、夫と妻を別々に見てみると、国際結婚夫婦、日本人同士夫婦いずれにおいても、「自己中心」的な態度の認識と「力関係」の間に相関が見られたのは夫の側であり、妻では関係性が見られなかつたのである。つまり、妻にとって、夫の「自己中心」的な態度は自明のことであり、改めてそれが夫婦間の会話における「力関係」を示すものと捉えられなかつたからではないだろうか。翻って、夫にとっては「自己中心」的な態度をとらないであろうと「期待」していた妻が、「自己中心」的な態度をとっていると認識されることで、したがつて夫婦の会話に「力関係」が生じていると感じられるのだろうと思われる。また、母語の異なる二者の会話では、使用言語の母語話者の方が話題転換の主導権を握っているという知見（小田切 1997）もある。したがつて夫婦での会話で主に日本語を使用する「日本人夫、外国人妻」夫婦においては、日本語母語話者である日本人夫の方が会話をリードしたりまとめたりすることが当然と見なされ、夫婦間コミュニケーションにおいて外国人妻が日本人夫の「自己中心」的な態度を容認するような相貌を呈しているといえよう。だからといって外国人妻がこうした日本人夫の態度に寛容であることを意味するのではなく、総じて日本人夫との会話において「力関係」を感じているのである。これは、日本における国際結婚夫婦において一種の使用言語に伴う力の偏在性を内含していることを改めて示していると思われる。

#### 外国人妻において日本人夫の「非円滑」な態度への認識と「力関係」には関連性がある

国際結婚夫婦では、配偶者の「非円滑」な態度に対する認識と会話の印象のすべての因子に亘つて有意な相関が認められたのに対し、日本人同士夫婦においては、配偶者の「非円滑」な態度に対する認識と会話の印象との間で関連性が認められなかつた。「言葉の使い方が不適切だったり間違つたりする」「話があちこち飛んで言いたいことがまとまらない」「話のテンポや洒落についていけない」などの「非円滑」な態度は、母語を同じくする者同士の会話でも決して珍しいものではない。したがつて、日本人同士夫婦にとって、そうした態度に対する認識が取り立てて夫婦間の会話の印象に関与することはなかつたのかもしれないし、あるいは、多少の会話の齟齬やズレなら、前後の会話で調整できると考えられたのだろうか。日本人同士の夫

婦に関する研究において、互いの親密性や共感性を促進し相互理解を深めるような相手へのコミュニケーションの働きかけが親密な夫婦関係の構築には必要であると指摘されているように(野末・岩井 2004)、配偶者の会話の適切さや円滑さよりも、情緒や情報を共有できることの方が、夫婦間の会話の印象において要諦となっているからであろう。本研究においても、夫婦単位でも、夫、妻を区別して見ても、配偶者の「親和的接近」態度への認識が、夫婦間の会話における「肯定的印象」と関連性があった結果もこのことを裏付けている。

しかし、互いに異なる母語や文化的背景を持つ国際結婚夫婦のコミュニケーションでは、大なり小なり、意識的、無意識的問わず、夫婦の間に横たわる相違を乗り越える努力なり苦労なりが伴うと想像される。そのため、こうした大変さに加えて、さらに配偶者の「非円滑」なコミュニケーション態度が認識されると、看過できない態度と見なされ、イライラ感やストレスが募り、対等で楽しい夫婦の会話の妨げとなって揺曳しているのではないだろうか。

さらに、国際結婚夫婦において、配偶者の「非円滑」な態度に対する認識が、「力関係」の印象とも相関があったことに着目したい。結婚当初は互いの母語やコミュニケーションスタイルが異なることを、意識の上では承知していたはずである。したがって、夫婦間の母語やコミュニケーションスタイルの相違を認識することが、結婚当初から、夫婦間の会話における「力関係」を彷彿させるものであり、何年経ってもそれが払拭されないということなのだろうか。しかもそのことは、日本人夫ではなく、外国人妻を感じていたようである。国際結婚夫婦のうち、日本人夫においては配偶者の「非円滑」な態度への認識と「力関係」に相関は見られなかった。このことから、日本に住み、日本語を使って話す外国人妻に対し、日本人夫は外国人妻の「非円滑」な態度を承知した上で、対等な関係を築こうとしたのではないだろうか。一方、外国人妻には配偶者の「非円滑」な態度への認識と「力関係」の間に相関が見られることから、外国人妻が日本人夫の不適切な言葉の使い方や話へのノリの悪いことが気になり、夫婦間の会話に力の差を感じていることが分かる。夫婦間の会話における主な使用言語が日本語であることを踏まえれば、外国人妻は、日本語母語話者である日本人夫が、言葉の正確さに注意せず間違った言葉を使用したり、話を整理して話してくれなかったり、話に乗ってくれないと日本語非母語話者である自分に対する配慮が足りないと感じた時、日本人夫との間に力の差を感じるのであろう。日本で母語の使用が認められる機会の少ない非欧米系出身の外国人妻には、日本語力が日本社会への適応の足枷となっていることが示唆されている(劉 2006, 中澤 1996)が、そのような外国人妻に対し、日本語母語話者である日本人夫には、彼女の母語やコミュニケーションスタイルの理解とともに、母語でない日本語を使って生活する外国人妻の勞を汲み取り、それに配慮した言葉遣いや話し方が求められるといえるだろう。

## 5. 今後の課題

本研究では、「日本人夫、外国人妻」の国際結婚夫婦における、配偶者のコミュニケーション態度に対する認識と夫婦間コミュニケーションの印象との関連性の特徴を明らかにした。しかし、コミュニケーションとは、自分と相手と相互に行われる行為であり、相手の態度だけでなく、自分の態度に対する認識も踏まえた検討が必要である。また、コミュニケーション態度

や印象についてより詳細なデータを得るためにも、聞き取り調査などを行う必要性もある。

#### 付記

本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号：19720120 研究代表者：伊藤孝恵）の助成によって行われた。

#### 註

1. 本稿でいう「日本人」とは、日本で生まれ育ち、日本語を母語とし日本国籍を有する者を指す。また、「外国人」とは、日本以外の国で出生した後、青少年期を日本以外の国で過ごした日本語を母語としない者を指す。そのため、理屈上「外国人妻」の中には、所謂「日本人」と国際結婚した後、日本に帰化して日本国籍を有する海外出身者も含まれるが、本研究において該当者はいなかった。

#### 参考文献

- 朝日新聞（2005）「変身 半世紀 20組に1組が国際結婚」2005年1月8日朝刊。
- 石井由香（1995）「国際結婚の現状」『講座外国人定住問題2 定住化する外国人』駒井洋（監修），明石書店 75-102.
- 伊藤孝恵（2009）「国際結婚夫婦のコミュニケーション態度の認識—『夫日本人、妻外国人』夫婦の夫婦単位での特徴を中心に—」『言語文化と日本語教育』38, 20-29.
- 小田切由香子（1997）「異言語文化間・男女間コミュニケーションにおける性差—会話開始における話題転換の特徴—」『横浜国立大学留学生センター紀要』4, 42-53.
- 葛慧芬（1999）「国際結婚に対する地域ケアシステム作りの必要性—中国人花嫁の事例から—」『日中社会学研究』7, 146-165.
- 門野里栄子（1995）「夫婦間の話し合いと夫婦関係満足度」『家族社会学研究』7, 57-67.
- 賽漢卓娜（2010）「中国人女性結婚移民の『移動の物語り』—『農村の花嫁』像を問い直す」家族問題研究学会研究例会 口頭発表 2010年1月9日 於 早稲田大学。
- 佐藤悦子（1991）「夫婦関係の活性化—コミュニケーションと親密性」『現代のエスプリ ニューセラピー』283, 48-57.
- 施利平（2000）「国際結婚夫婦におけるコミュニケーションと婚姻満足度」『ソシオロジ』44(3), 57-73.
- 土倉玲子（2005）「中年期夫婦における評価ギャップと会話時間」『社会心理学研究』21(2), 79-90.
- 平山順子・柏木惠子（2001）「中年期夫婦のコミュニケーション態度：夫と妻は異なるのか？」『発達心理学研究』12(3), 216-227.
- 中澤進之右（1996）「農村におけるアジア系外国人妻の生活と居住意識」—山形県最上地方の中・台湾・韓国・フィリピン出身者を対象にして—『家族社会学研究』8, 81-96.
- 野末武義・岩井昌也（2004）「夫婦のコミュニケーションに見るジェンダーの問題」『家族心理年報22 家族内コミュニケーション—こころを運ぶことばの力』金子書房 112-125.

- 松本佑子 (2001) 「国際結婚における夫婦関係に関する一考察—フィリピン妻の意識を中心に—」  
『聖徳大学研究紀要 人文学部』 12, 17-22.
- 宮野直子 (1965) 「近代家族における夫婦関係の不安定性—性格の異質性からの考察—」『大阪女子学園短期大学紀要』 9, 115-135.
- 劉榮純 (2006) 「日本における国際結婚—韓国人妻のアンケート調査・分析を通して—」『プール学院大学研究紀要』 46, 69-85.